2026（令和８）年度

小　論　文

10：00 ～ 11：30

教養学部

学校教育学科

学校推薦型選抜（一般）

注　意　事　項

1. 合図があるまで、この冊子と解答用紙を開いてはいけません。
2. 合図があったら最初に、受験番号を解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
3. この冊子と解答用紙について、印刷の不鮮明な箇所や、汚れの箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答用紙は２枚配布しますが、１枚だけ提出しなさい。残りの１枚は下書き用です。
5. 解答は**縦書き**で書きなさい。
6. この冊子と下書きに用いた解答用紙は、持ち帰ってください。

課題文を読んで、以下の設問に答えなさい。

課題文

よく、ルソーは「子どもの発見者」であると言われます。

子どもには子ども特有の感じ方、考え方、成長のしかたがあるのであって、それを無視して教育なんてできるはずがない。子どもを知ること。教育は、何をおいてもまずはそれからだ。そうルソーは言ったのです。

今日の学校でも、「子どもの事実」という言葉がしばしば使われます。これはとても大事なことだとわたしは思います。

多くの学校では、「学習指導案」というものを先生たちがつくっています。文字どおり、子どもたちの学習をどう指導していくかの計画案です。

でも、もしそれが、子どもたちに何を、いつ、どんなふうに学ばせるか、という視点だけでつくられてしまったら、子どもたちは置き去りにされてしまうことになるでしょう。子どもが何を求めているのか、何を学びたいのかという〝事実〟が、無視されてしまうのです。

そこで学習指導案には、先生が子どもの実態を把握し、それを意識しておくために、「児童観」のような項目が設けられています。「クラスにはまとまりがあり、授業にも落ち着いて参加している」「前段にあたる○○の学習に熱心に取り組んでいた」といったことが、そこに記述されることになります。多くの先生は、そのような児童観(子どもの事実)をしっかり意識しながら、授業をしようとしているのです。

でも、その児童観(子どもの事実)もまた、学校や教師の都合に合わせたものになってはいないか、わたしたちはたえず意識しておかなければなりません。

学校は、どうしても、いつまでにどれくらい授業が進んでいなければならないかということを気にせざるを得ないところで

す。だから、まずは学ばせるべきことがあって、それを大人が決めたスケジュール通りに、子どもたちに学ばせていく、ということになりやすい。

とすると、ア「子どもの事実」も、その関心から見た事実になってしまいやすい。教師が学ばせたい内容を学ぶにあたって、子どもたちはどれくらい準備が整っているか。あるいは整っていないか。そろそろ割り算をはじめるけど、みんなこれまでの学習内容はちゃんと理解してるかな。そんなことに意識が向きやすくなるのです。

むろん、このこと自体はとても大事なことです。でも、そもそも子どもは、割り算を本当に学びたいと思っているのでしょうか？　その〝必要〟を感じているのでしょうか？　先生の見ている「子どもの事実」は、じつは、教師のコントロール下にどれだけ子どもが入りやすいかを見たものになってしまってはいないでしょうか。

またあとで見るように、ルソーは、子どもの「学びたい」という意欲が出てくるまで、無理に勉強させ、知識をつめ込むことを批判しました。何のためにこんなことをさせられるのかがわからなくなって、子どもはかえって学ぶことが嫌いになってしまうからです。

本来、子どもは〝みずから学ぶ〟ことが大好きです。赤ちゃんの時からそうです。ベビーベッドの上で、周りに置かれたおもちゃを手に取って、あれやこれや観察したり、引っ張ったりしている姿を、みなさんもご覧になったことがあるでしょう。なぜか恐竜にひどく魅せられて、図書館の恐竜図鑑をむさぼり読むような子もたくさんいます。

特別な子だけがそうなのではありません。子どもはだれだってみんなそうです。「うちの子はめんどくさがり屋で、何にも興味も持たないし、勉強もしないし……」と言う親がいますが、ルソーなら言うでしょう。いやいや、もっと「子どもを見よ」と。

子どもはいつも何かに夢中になっています。ふと見つけたアリの行列をずっと観察したり、買ってもらったお人形を使って、空想の中、ずっとひとり遊びをしていたり。大人がそれに気づかないとしたら、ただ単にちゃんと見ていないだけなのです。

あるいは、もし本当に「何にも興味を持っていない」のだとするなら、それはむしろ大人がそうさせてしまったのではないかと考えるべきです。ルソーの言葉を紹介しましょう。

あれしなさい、これしなさい。あれするな、これするな。――そんなことばかり言い続けていたら、その子はそのうち、「息をしなさい」と言わないと呼吸さえできなくなるぞ。

これは、じつはわたしの意訳です。ルソー自身の言葉は以下になります。

たえずなにか教えようとする権威に全面的に従っているあなたの生徒は、なにか言われなければなにもしない。腹がへっても食べることができず、愉快になっても笑うことができず、悲しくなっても涙を流すこともできないし、一方の手のかわりに他方の手をさしだすこともできず、いいつけられたとおりにしか足を動かすことができない。そのうちには、あなたの規則どおりにしか呼吸することができなくなるだろう。（上・二四三―二四四頁）（注）

学ぶというのは、本来、とても楽しいことです。知らなかったことを知るようになる。できなかったことができるようになる。世界が広がる。学びを通して、仲間もできる。

その過程で、うまくいかなかったり、わからなかったりと、苦しむこともあるでしょう。でも根底においては、やっぱり学びは、みずからの成長を実感できる楽しいことであるにちがいありません。そして子どもは、本来、そのような学びへの意欲を持っているのです。

これが、ルソーが〝発見〟した子どもの根本的な事実の一つです。

したがって、この意欲と無関係に勉強させることは、むしろ害悪ということになります。本当は好きになるはずの学びを、嫌いにさせてしまうかもしれないからです。

人は、子どもにとってなんの意味もないことばを、それが学問であるかのように考えさせることによって、はかりしれない有害な偏見をかれらの頭に植えつけようとしているのではないか。（上・二二三頁）

子どもは、もともと学びたいという意欲を持っています。それなら、子ども時代に周囲の大人が意識するべきは、その意欲を大事にすることです。

ルソーは次のようにも言います。

子どもに学問を教えることが問題なのではなく、学問を愛する趣味をあたえ、この趣味がもっと発達したときに学問をまなぶための方法を教えることが問題なのだ。これこそたしかに、あらゆるよい教育の根本原則だ。（上・三八六頁）

学習内容を教え込むのではなく、子どもが学ぶことそれ自体を好きになること。それこそ、子ども時代の教育にとって最も重要なことなのです。

それはいったい、どうやって？

学びが遊びのようであること。別言すれば、子どもが学びへの強い動機を持てること。それが何より重要です。

あたりまえのことですが、興味も必要もないところに、学びは起こりようがないのです。他方、イ強い動機に導かれた学びは、わたしたちを、学ぶことそれ自体を愛する者にしてくれるにちがいありません。

いやいや、それはそうかもしれないけど……。

そう思った方は、少なくないのではないかと思います。

それはそうかもしれないけど、学校はどうしたって、興味のないことも子どもたちに勉強させないといけないじゃないか。ルソーの教育論は、やっぱり単なる理想論なんじゃないの？

たしかに、日本では文部科学省が「学習指導要領」というのを出していて、何年生の時に何を学ぶかということが示されています。その中には、子どもたちが興味を持てないようなものもあるでしょう。

でもわたしたちは本当に、子どもたちが興味を持てないことを、それでもとりあえず我慢して勉強させるということでよいの

でしょうか。学校は、結局はそのような場所であり続けるほかないのでしょうか？

いいえ、そんなことはありません。

ルソーの教育論は、その後、教育の天才と呼ばれたヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチによって実践されていくことになります。そのバトンは、幼児教育の祖と言われるフリードリヒ・フレーベルや、二十世紀の教育に絶大な影響を与えたジョン・デューイらにも受け継がれていきました。

いまや世界中の学校で、彼らの考えを源流とする実践が行われています。

日本も例外ではありません。ルソー、ペスタロッチ、フレーベル、デューイらの教育思想は、やがて近代日本にも到達します。そして日本の文化、風土、思想などと合わさって、独自の発展を遂げることになるのです。

出典：苫野一徳『『エミール』を読む』（岩波書店、二〇二四年）。ただし、一部を改変した。

注　（上・二四三―二四四頁）とは、ジャン＝ジャック・ルソー著、今野一雄訳『エミール（上・中・下）』（岩波文庫、二〇〇七年改版）の、上巻二四三―二四四ページ、を意味しています。他の箇所も同様です。

設問一　傍線部アで、筆者は、「『子どもの事実』も、その関心から見た事実になってしまいやすい。」と述べていますが、それは、どういうことですか。「子どもの事実」とは何かに触れながら、課題文に即して、二〇〇字以内で説明しなさい。

設問二　傍線部イの「強い動機に導かれた学びは、わたしたちを、学ぶことそれ自体を愛する者にしてくれるにちがいありません。」とはどのようなことか、課題文の趣旨を踏まえながら、あなたの体験や見聞を交えて、六〇〇字以内で論じなさい。